



医師となって以来、長尾は患者の身体に触れ、脈拍数を計る脈診を大切にしてきた。

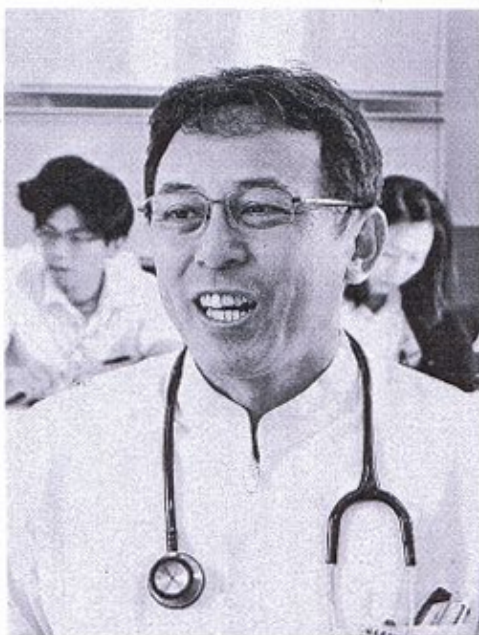
「脈の中にその人の人生を感じる」ことが出来る町医者になりたい」

そんな夢を抱き、平成7年に開業した診療所だったが、運営には苦労した。

最初の2年間は来院患者が少なく、1人もない日もあった。たまに患者が来ると1時間以上も話し込んだり、診察室で一緒に酒を飲んだこともある。特に夕方は患者が少なく、診療用ベッドでうたた寝をしながら、「こんなことでいいのかな」と憂う日が続いた。

3年目ぐらいから患者が増えるようになったが、今度は階段まで人があふれ出るなど診療所の手狭さが問題になった。

長尾クリニック院長 長尾和宏さん ⑤



「在宅医療は天職」と語る長尾さん。目指す道に迷いはない
ニ崎市昭和通

患者とともに泣き、笑う

目指す診療がようやく形になり始めたのは開業から7年後の14年。診療所を尼崎市の国道2号沿いに移転させ、古い銀行の建物を改装し、年中無休の外來診療体制を整えた。17年には訪問看護ステーション、居宅介護

支援事業所を併設した在宅医療ステーションを設置。医師や看護師、ケアマネジャー、理学療法士らスタッフがチームを組み、本格的な在宅医療に乗り出した。以来、約300人、年間約40人の患者を在宅で看取って

きた。長尾は言う。「在宅医療の現場は医の心を思い出し、患者さんから色々なことを教えていただく貴重な場。患者とともに泣き、ともに笑う在宅医療は天職」。

病気の予防にも力を入れている。大学時代は1日3箱を吸うヘビースモーカーだったが、すっぱりと止めた。開業以来、たばこが原因とみられる末期がんや肺気腫で苦しむ患者を何度も診てきたからだ。「医師として、どうしても早く禁煙させられなかったのか。やせ細り、死期が迫った患者を前に強い無力感と後悔の念にさいなまれた経験が禁煙指導に駆り立てた。

これまでに喫煙の弊害や最新の禁煙治療法などをまとめた「禁煙で人生を変えよう」編されている日本の喫煙者(エビソク社)を自費出版したほか、

高校や大学でたばこの健康被害について講演を続けている。キヤッチフレーズは「尼崎だから禁煙、尼崎から禁煙」。アスベスト禍や公害ぜんそくなど環境問題で揺れた歴史を持つ街ならではの訴えだ。

常に患者の生と死に向き合う日々を過ごしているからか、長尾は同郷(香川県善通寺市)の宗教家で真言宗の開祖、空海を尊敬してやまない。趣味は寺巡りと仏像拝観。仏像を眺めながら静かに自分の心を見つめ、決意を新たにしている。

目指すのは「苦しまない最新の医療」「在宅で自然で尊厳ある最期をサポートする医療」の表現。現代医療が専門分野に細分化されつつあっても、長尾はあくまで総合的に患者を診る理想の医療を追い求めていくつもりだ。

すべては、多くの患者が住み慣れた家で愛する家族に見守られながら「ありがとう」とほほ笑んで最期を迎えられるために。

(この項は奥山正弘が担当しました)

(敬称略)